

---

# 駅前

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駅前

### 【Nコード】

N5067A

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

駅前の哀愁漂うインスピレーションのみで書いた作品。

「えっと…つまりは…」

「始まりがあれば、終わりがあるってこと？」

「そうさ。」

「なんにしても…始まらなければ、なんにもならないじゃないか。」

「でも、それは僕らが決めることじゃないだろう？」

「この本を手にとってくれた物好きな人がこの物語を始めるんだ。」

「つまらないかもしれないよ？」

「まあ、なんにしても…」

「まだ、始まってすらいないんだ。」

夕闇が滑るようにやってきて夜が訪れるまでには、そんなにはかからない。

ついさっきまで賑やかだった駅前も、今は静まり返っていた。

吸い込んで、吐き出すのに疲れた列車が、小さくなっていく。

まばらな影達は下を向いて散らばっていく。

朝はあんなに多くの人間を集めていたのに。

帰る場所がある人は、急ぎ足で、屋根のある暖かい部屋を目指した。

帰る場所がない人も、とりあえず家を目指した。

夜が幾分か濃くなると、完全に人が消え失せる。

くたびれた列車も今日は眠る。

僕は、僕らは……「もう誰もいなくなってしまった」

誰に云うでもなく僕は云った。

あんなに手を振っていたのに、あんなに楽しかったのに…

夜は熱を奪っていく。

闇は光を奪っていく。

遠くの方で野良犬が吠えている。

それは僕には関係なくて。

つながりを持たないものの一つ。

その無関係さが寒々しくて、身が凍えそうだ。

誰かと繋がっていたくなって、動かない携帯を握り締めた。

動かなくなっただけから、僕はこの箱を捨てられずにいる。

いつものように反応のない携帯は、まるで放課後の廊下みたいに冷たくて固い。

空気が音もたてずに震える。

他愛のない昼間の会話を考えたり、僕がいった意味のない冗談を思いつくようにする。

けれども、どれひとつ思い出すことができない。

奪っていった熱と一緒に何かが失われた。

「寒くなる前に帰ろうか。」

誰に云うでもなく僕は云った。

まるで、いままで友達とカラオケをしていて、楽しくて時間を忘れていたかのような...

明るいコエで...

「ただいま」

といってドアを開けなければならない。

僕はドアノブに伸ばした手に力を入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5067a/>

---

駅前

2011年1月19日23時24分発行